



古代の

日本 靈 異 記 論

と 教 仙

古 比 直 櫨 重 八

Naohiko Yaegashi

天 皇

房 書 林 翰

皇子に生まれ変わった禪師——下巻第三九話 その一

はじめに

ここに取り上げる下巻第三九話「智行並具禪師重得人身生国皇之子縁」は、『日本靈異記』上中下三巻全百十六話の最終話である。先行する諸説話が、概ね遮悪作善を勧める因果応報譚の繰り返してあったのに比較してみると、本話とその前の第三八話とは、内容の上で異なっているという印象を受ける。第三八話「災与善表相先現而後其災善答被縁」は、その題名にもあるように吉事・凶事には必ずその前兆があるのだということを、歴史上の事件や編者景戒の体験を例示して述べている。ここでは、現報——一生の内で完結する因果応報——の必至であることを説いているのではない。果報の予知は可能なのだということが言われていると考えられる。編者自身の体験が告白的な調子で語られることとともに、果報の前兆を正面切って論じる第三八話の因果律への対し方は、先行する諸説話とは異なる

っている。こうした特異な内容の第三八話の後に位置し、しかも『靈異記』の全体の最終話となっているのが第三九話なのである。

一見するとそれは先行する諸説話と同型の因果応報譚の記述に逆もどりしたかのような印象を受ける。いわばごくありきたりの因果応報譚で『靈異記』全体が締めくくられているように見えるのである。けれども、特異な内容の第三八話との前後関係に、特別な意味を読み取る諸先学の考察を参照するならば、本話は平凡な因果応報譚などでありはしないのである。編者は、第三八話に自分自身を登場させ、続いて本話で嵯峨天皇聖君論を展開する。それは編者の嵯峨天皇に対する熱烈な忠誠心の発露である。そしてこの編者の忠誠心は、上巻第一話で示された少師部栖輕の雄略天皇に対する忠誠心に呼応する。つまり第三八・第三九の二話は、一つの綿密な企画に基づいて最後尾に置かれたのである。第三八話と共に本話には、先行諸説話とは異なった特別な意味が付与されていたことになるのである。⁽¹⁾上巻第一話と下巻第三八・第三九の二話との呼応が指摘されたことは、『靈異記』全体の構想、編纂意識、そして編者の思想を探る上で貴重な成果であると言える。

しかし第三八・三九の二話が、両者相まって編者の嵯峨天皇に対する熱烈な忠誠心を表明しているという指摘は今一つ説得力が欠けているように思われる。それぞれに別個の説話として独立している二話を、なぜ不可分のものとして読まなければならないのであろうか。第三八話に編者自身が登場するということが、第三九話で嵯峨天皇聖君論を展開しているということ、この二つを結び付けているのは編者の忠誠心だけであらうか。先学の指摘は極めて魅力的であるが、しかしまだ立論の根拠が十分

に固められていないように見受けられる。改めて最後尾の二話に対して、個別的に、様々の角度からの考察を深めて行く必要があると思う。

ここでは、第三九話について、従来の考察では指摘されなかった特異性を明らかにしてみたい。

一 上巻第五話との比較

まず下巻第三九話「智行並具禪師重得人身生国皇之子縁」の概要を記してみる。本話は三つの部分から成っている。第一は、善珠が死後、桓武天皇の皇子大徳親王に生まれ変わったという話である。第二は、寂仙が死後、同じく桓武天皇の皇子に生まれ変わり、神野親王と称され、この親王は後に即位して賀美能天皇（嵯峨天皇）となったという話である。第三は、『靈異記』全体の結語である。つまり本話は、同型の僧侶の皇室への転生話二つを主要部分として構成され、最終話であるためにこれに結語が付加されたという体裁なのである。なお第二の部分には、嵯峨天皇聖君論が問答形式で記されており、こうしたいわゆる聖君問答を付加したのは、先に述べたとおり編者の嵯峨天皇に対する忠誠心の現れであるとの指摘がなされている。本話をその内容から、また題名から一つの類型として把握しようとすれば、僧侶の皇室への転生説話ということになる。

ではこうした形態の説話は『靈異記』全体の中では格別に珍しいものであろうか。先に、一見するとありきたりの応報譚のようであると言ったように、『靈異記』全体を眺め渡すと転生を扱った説話は非常に多いのである。その正式の名称が『日本国現報善惡靈異記』であることからすでに明らかのように、編者が主として力説したのは現報——一生の内で完結する因果応報——であった。しかし編者の関心は前生や次生にも向けられている。生報——連続する二生にまたがる因果応報——譚や、後報——連続しない二生にまたがる因果応報——譚の例は、『靈異記』の中に数多く見出される。今それらを厳密に他と区別してここに列挙することは困難であるが、何らかの形で転生に係わる説話はおそらく全体の半数を超えているのではなからうかと思われる。つまり本話は転生を扱った話としてはごく平凡な説話にすぎないのである。

しかし本話には他とは異なった点がある。それが唯一の特異な点であると言いつけるかどうかは分からないが、少なくとも大いに注目すべき相違点であることに変わりはない。転生とは、Aが死んで後にBに生まれるという生まれ変わりのことを言うのであるが、このA——前身——やB——後身——に皇室の一員が顔を出す例は、『靈異記』の中ではごく稀なのである。皇室という名の下に囲い込まれる人々が特別な存在であるとする意識が、編者の胸中にも備わっていたらしいことは、本話の題名に「重ねて人身を得て、国皇の子に生まる」とあることからほぼ推測できるであろう。それが熱烈な忠誠心を向ける対象であると、編者が意識していたか否かについては、結論を一応保留しておくとしても、やはり他とは際立って異なる存在であると見なされていたことは間違いないと思われる。本話以外に皇室のからんだ転生の例は一つしかない。⁽²⁾それは上巻第五話「信敬三宝得現報縁」に見える。聖徳太子の腹心であった大部屋栖野古は、推古天皇三十三年十二月八日に息を引き取った。しかし屋

栖野古は三日後に蘇生して、妻子に次のように語った。彼はいずれとも知れぬ黄金の山で、先に没した聖徳太子に会った。太子は屋栖野古に次のように言った。

速還家。除作仏処。我悔過畢。還宮作仏。

このように言い渡された屋栖野古は、黄金の山から引き返す途中で蘇ったというのである。この屋栖野古の他界訪問蘇生譚とも言うべきものは上巻第五話の一部分なのであるが、編者はこの説話の末尾で謎解きをしてみせる。

還宮作仏者。勝宝応真聖武太上天皇。生于日本国。作寺作仏也。

この謎解きによれば、太子が屋栖野古に仏像を作る場所を清めておけと命じたのは、太子が聖武天皇に生まれ変わって寺や仏像を作ろうとしたためであったということになる。つまり上巻第五話では、聖徳太子が転生して聖武天皇となるという、皇室内部の転生が語られているのである。皇室の構成員が顔を出す転生の例は、この上巻第五話と下巻第三九話だけなのである。その点でこの二話は異例な説話であると言えるのである。

さて、それはすぐに気付くことなのであるが、次には逆に上巻第五話と下巻第三九話との間には相違するところがある。上巻第五話の場合は、その題名に従えば、大部屋栖野古の偉大な事績、とりわけ三宝を敬って現報を得たことに叙述の力点が置かれている。聖徳太子の聖武天皇への転生という話柄は、全体から見れば一つの挿話にすぎない。一方、下巻第三九話の場合は、善珠の大徳親王への転生と寂仙の神野親王への転生とは説話全体の骨格をなしており、それを除いてしまつては話そのものの

が成立し得ないことになる。皇室がらみの転生の持つ意味が二つの話の間ではまったく異なっている。またもう一つ、上巻第五話の場合、皇室から皇室へという転生であったが、下巻第三九話の場合は、僧侶から皇室へという転生である。前者は皇室内部の転生であるが、後者はその非構成員より皇室への転生である。この点も両者の間で異なる点である。第三九話は、僧侶——皇室の構成員ではない——の皇室への転生話であるという点で、『靈異記』全体の中でも異例な説話なのである。

二 聖徳太子慧思後身説との比較

前節では、下巻第三九話が『靈異記』内部では異例な説話であるということ述べたのであるが、ここでは、外部に比較の対象を求め、それとの共通点・相違点を指摘し、さらに若干の私見を付してみたい。

ここに取り上げるのは聖徳太子慧思後身説と称されるものである。中国における天台宗の大成者は智顗（五三八〜五九七）であるが、この智顗が師事した高僧が慧思（五一五〜五七七）である。慧思は死後日本の皇室に生を享けたが、それが聖徳太子であるというのが聖徳太子慧思後身説である。この説は、鑑真（六八八〜七六三）の死の前後ごろから、彼に同行した弟子僧やその周辺から発生したもののようである。⁽³⁾そしてその文献上の初見は、淡海三船（七二二〜七八五）の「五言。愿従聖徳宮詩。一首⁽⁴⁾」である。それには、「南嶽に禅影を留め 東洲に応身を現はす」とある。この漢詩は、『伝述一⁽⁴⁾」である。それには、「南嶽に禅影を留め 東洲に応身を現はす」とある。この漢詩は、『伝述一

心戒文』中巻にも「景雲元年三月天皇巡行諸寺旋駕聖德太子寺。一首」と題して引用されているが、これに従うならば神護景雲元年（七六七）三月、淡海三船が称徳天皇の諸寺巡行に従って法隆寺を訪れた時の作ということになる。同じく『伝述一心戒文』中巻には、これと並べて最澄（七六七？～八二二）の「入四天王寺上宮廟求伝法華宗詩」が引用されているが、その序には次のようにある。

今我法華 聖德太子者。即是。南嶽慧思大師後身也。厩戸託生。汲引四国。請持經於大唐。興妙法於日域。等鐸振天台。相承其法。日本玄孫。興福寺沙門最澄。雖愚。願弘我師教。不任渴仰心。謹奉一首。⁽⁶⁾

日本天台の創始者である最澄は、この説を踏まえて聖德太子の後継者を自任していたことになるであろう。この聖德太子慧思後身説は、様々の聖德太子伝説の中でも恐らくよく知られた部類に属するであろうが、その発生の理由についてはよく分らない。

『日本書紀』巻二二、推古天皇二十一年十二月庚午朔・同辛未の二条にかけて掲げられた片岡山飢人説話も、聖德太子伝説として著名なものであるが、奈良時代中期以降、太子の前に現れた飢人は達磨の後身であるとの説が発生した。これについては、達磨の法系を引く唐僧、道璿（七〇二～七六〇）が、来日（七三六）後、異国である我が国での活動を正当化するために飢人と達磨とを結び付けようとしたのではないかという推定がなされている。⁽⁷⁾この推定に従うならば、太子の慧思後身説も渡来僧の日本における自己の活動の正当化の便法として生み出され、後には日本天台の権威を高めるために用いられるようになったと見なすことも可能であろうか。

さて、この聖德太子慧思後身説の発生とその流布の始まりとを見てみると、それは『靈異記』編者とほぼ同時代のことであった。しかし『靈異記』にはこの説は取り入れられてはいないし、編者がこの説を知っていたらしい形跡すらない。ただし本当に知らなかったかどうかは分からない。飢人達磨後身説についても同様である。しかし、僧侶の皇室への転生が語られる点で『靈異記』下巻第三九話と同型である。

第三九話の二つの転生話と聖德太子慧思後身説とを比較してみると、次のようなことが言える。聖德太子慧思後身説の場合、この説の発生の時点で太子は遠い過去の人であった。これに対して第三九話の場合は、大徳親王も神野親王も編者と同時代の人である。特に神野親王の場合は、「今、平安宮に十四年疏して、天下を治めたまふ賀美野天皇、是なり」とあるように、編者にとっては今上天皇なのである。そして編者においては、嵯峨天皇寂仙後身説が聖君論の第一の根拠となっているのである。右の文は次のように続けられている。

是以定知。此聖君也。

『記』『紀』の神孫為君のイデオロギーとは異なった、転生の思想を土台にした嵯峨天皇聖君論が説話の形態の下に提示されたのである。聖德太子慧思後身説の場合、それがどのような理由、あるいは必要によって発生したのか、なお不明なのであるが、嵯峨天皇寂仙後身説の場合は、『靈異記』編者のすぐれて現代的な関心によって、あるいは嵯峨天皇を聖君とみなさなければならぬ必要に迫られて、『靈異記』の世界に搬入されたことは間違いないことである。なお、編者のすぐれて現代的な関心

や、転生の思想を土台とした嵯峨天皇聖君展開論の必要性については今後の解明すべき課題としたい。⁽⁸⁾

第三九話と聖徳太子慧思後身説とを比較して気付くことがもう一つある。前者に登場するのはいずれも日本に生まれ死んだ人々ばかりである。善珠・大徳親王・寂仙・神野親王、いずれも外国人と見なし得る人ではない。これに対し後者の場合、慧思は明らかに異国の人である。聖徳太子慧思後身説は、いわば二国にまたがる国際的な転生生活なのである。この相違点は注目してよいのではなからうか。『靈異記』の場合、皇室がらみの転生を扱った上巻第五話も下巻第三九話も、転生は国内で完結している。それは編者のナシヨナリズムの表れであろうか。しかしそれは先にも述べたとおり、『記』『紀』の神孫為君のイデオロギーとは異質なナシヨナリズムである。また皇室がらみの転生から外国人を排除することで表されたナシヨナリズムである。外国人僧への対抗意識を土台とした日本人僧のナシヨナリズムではなかったかと思われるのである。

三 『文徳天皇実録』所収伝承との比較

前節に続いてここではもう一つ外部の例をあげてみよう。

第三九話の寂仙の転生話と同根の説話と見なし得るものがある。『日本文徳天皇実録』嘉祥三年五月壬午（五日）条に掲げられた嵯峨天皇の皇后、橘嘉智子伝に「故老相伝」として収録された説話である。⁽⁹⁾ そのあらましを述べると、次のとおりである。

伊予国神野郡に灼然という僧がいた。灼然には上仙という弟子があつた。この上仙はある時、檀越に次のように語った。

我。本在人間。有同天子之尊。多受快樂。爾時。作是一念。我。当来生。得作天子。我。今出家。常治禪病。雖遣余習。氣分猶殘。我。如為天子。必以郡名。為名字。

間もなく上仙は息を引き取った。同郡に橘^{たちばな}姫と称される老婆がいた。彼女は上仙の檀越の一人であつたが、次生にも上仙の近くに在りたいと言い、にわかには息を引き取った。その後、桓武天皇の皇子が誕生したが、乳母の姓を取って神野親王と名付けられた。親王の妃は橘夫人と称した。上仙は神野親王（後の嵯峨天皇）の前身であり、橘夫人（後の皇后）は橘姫の後身である。

この説話と『靈異記』下巻第三九話とを比較してみると、まず目に付くのは、前者が二人一組の転生話となっていることである。そのほか多くの相違点が目に付くが、ここで注目したいのは、上仙が檀越に語ったことばである。先に引用した中で、「我、本、人間に在って、天子の尊きに同くして、多く快樂を受けること有り」と、「我、今、出家して、常に禪病を治す。余習を遣ると雖も、氣分、猶殘れり」との二箇所は、『靈異記』にはまったく対応するところが見当たらない。この二箇所のあることによって、『文徳実録』の場合は、説話全体があたかも複数の生にまたがる貴種流離譚の様相を呈することになるのである。あるいは皇室の一員の複数の生にまたがる出家と還俗との話になり得るのである。どちらにしても上仙が前生か今生で皇室の一員であつたことをにおわせる点で違いはない。転生話の主人公の前身あるいは出家前の境遇に言及するとならないとが、二つの説話の相違点の一つなので

ある。つまり『文徳実録』の場合、僧侶の皇室への転生話ではあるが、皇室の外の者の皇室への転生話ではないかも知れないことになるのである。

四 小結

以上述べて来たことを整理してみると、『靈異記』下巻第三九話、すなわち本書の最終話は、皇室の一員ではない日本人僧侶の皇室への転生話であり、その点で『靈異記』の内外に例を見ない特異な説話であるということになる。そしてこうした異例な説話は、編者の嵯峨天皇聖君論の土台をなしており、編者におけるある差し迫った必要から『靈異記』に採録されたものらしいと推定されるのである。その差し迫った必要が何であつたかは、今後考察を加えて行かねばならないが、外国人僧侶に対する日本人僧侶のナショナリズムと結び付いたものであつたらしいと考えられるのである。

注(1)ここに要約した指摘は次の諸論考によっている。

①山根対助氏「道場法師説話の位置―日本靈異記の序に添って―」国語国文研究一八・一九合併号、北海道大学国語国文学会、一九六一年三月刊行、所収。

②原田行造氏「日本靈異記終末部の構想と警戒の意図」名古屋大学国語国文学二二号、一九六八年六月刊行、所収。

③小泉道氏「雷岡の墓標―『日本靈異記』冒頭説話をめぐって―」国語国文四三巻六号、京都大学文学部国語国文学研究室、一九七四年六月刊行、所収。

(2)下巻第二四話には、東天竺国の王が近江国の多賀社の猿身神に転生したという例がある。この説話の猿身神の前身は、インドの王族ではあっても、日本の皇室の一員ではない。そこで、ここでは除外した。

(3)新川登亀男氏『上宮聖徳太子伝補闕記の研究』吉川弘文館、一九八〇年九月刊行、一六一頁を参照した。

(4)『経国集』巻一〇。群書類聚第八輯、続郡書類聚完成会、一九六〇年四月訂正三版、五〇九頁。

(5)伝教大師全集第一巻、世界聖典刊行協会、一九七五年四月復刊、五九二頁。

(6)注(5)に同じ、五九一頁。

(7)注(3)に同じ、一五〇頁。

(8)この問題については、本書第一部第四章で触れている。

(9)新訂増補国史大系、普及版、吉川弘文館、一九七三年三月刊行、による。

(10)小泉道氏「石鎚山の寂仙の話をめぐって―『靈異記』の伊予説話研究―」愛媛大学法文学部論集、文学部第一号、一九六九年三月刊行所収、に両話の比較がなされている。

(11)注(8)に同じ。

皇子に生まれ変わった禪師―下巻第三九話 その二

はじめに

前章では次の事柄を指摘した。『靈異記』下巻第三九話、すなわち本書の最終話は、皇室の一員ではない日本人僧侶の皇室への転生話であり、その点で『靈異記』の内外に例を見ない特異な説話である。この下巻第三九話は二つの説話から成っているが、第一の説話の主人公が善珠であり、第二の説話の主人公が寂仙である。この二人に共通するのは、共に皇室の一員とは見なし得ないこと、外国人とは見なし得ないこと、僧侶であること、死後、皇子に生まれ変わったこと、以上の点である。これらの共通点をすべて備えた者の話が『靈異記』の内部にも外部にも見出だせないことを前章で指摘したのである。

善珠と寂仙との間で共通するのは、しかし以上の点だけではない。本章では、前章で触れなかった両者の共通点二つを取り上げ、それについて考えてみたい。

一 飯占いいうらと録文

本話によれば、善珠と寂仙とは共に相次いで桓武天皇の皇子に生まれ変わったというのであるが、ここでは両者の転生に関する場面を比較してみたい。

初めに善珠の転生の叙述を引用する。

I 而彼禪師（＝善珠）之頓右方。有大驚也。

II 平城宮治天下山部天皇（＝桓武）御世。延暦十七年之比頃。禪師善珠。臨命終時。依世俗法。問飯占時。神靈託卜者言。「我。必宿於日本国王之夫人丹治比嬢女之胎。將生王子。我面驚著生。以知虚実耳。」

III 命終之後。延暦十八年之比頃。丹治比夫人。誕生一王子。其頓右方驚著。如先善珠禪師之面驚。不失而著生。故名号大德親王。

IV 然。經三年許。存世而薨。向問飯卜時。大德親王之靈。託卜者言。「我。是善珠法師也。暫間生国王之子耳。為吾燒香供養者矣。」

右の引用は、本話の第一話の善珠の転生を叙述した、いわば第一話の中心部分である。ここは次のように区切られるであろう。

- I 善珠の顔の特徴。下あごの右側に大きなほくろがあった。
- II 善珠の臨終。臨終に際して飯占という一種の占いが行われた。
- III 皇子の誕生、顔の特徴、命名。ほくろが動かぬ証拠となり転生が確認され、大徳と命名された。
- IV 皇子の早世。皇子にも飯占が行われた。

善珠の臨終に際して飯占が行われ、また皇子にもそれが行われたというのである。この飯占が次生の吉祥を呼び込むために行われたのか、あるいは単に次生の吉凶を判断するためにのみ行われたのか、その目的は不明である。またその時、善珠の靈魂は卜者に乗り移り自己の次生を予告したというのであるが、これもそのように言挙げすることによって皇子への生まれ変わりを果し得たということなのか、あるいは自己の次生を予知していたということを語っているのか、右の引用からはどちらとも決しかねる。ただしここで明らかなのは、飯占によって善珠の皇子への生まれ変わりが周囲の者に認知されたということである。生まれ変わりは当事者だけの単なる主観的事実ではないとされているのである。そしてその場合に決め手になったのが下あごのほくろであった。

次に寂仙の転生の叙述を引用する。

- I 帝姬天皇（＝孝謙）御世。於天平宝字二年歲次戊戌年。寂仙禪師。臨命終日。而留録文。授弟子。告之而言。「自我命終以後。歷廿八年之間。生於國王之子。名為神野。是以當知。我寂仙。云々。」
- II 然。歷廿八年。而平安宮治天下山部天皇御世。延暦五年歲次丙寅年。則生於山部天皇々子。其名為神野親王。

右の引用は、第二話の寂仙の転生を叙述した第二話の中心部分であり、その点で先の第一話の引用に対応されるべき箇所である。これは二つに分けられるであろう。

- I 寂仙の臨終。寂仙は臨終に際して弟子に録文を託した。

- II 皇子の誕生と命名。生まれた皇子は神野と名付けられた。

寂仙は臨終に際して弟子に自己の皇子への生まれ変わりを予告する録文を託したと言うのである。これも先の善珠における飯占と同様に、録文を残したことによって皇子への転生を遂げ得たとも、また彼が生前に自己の次生を予知していたとも、どちらとも決めがたい。しかし先の飯占と同じように、ここでも録文の存在によって転生が他者に知られることとなったのである。そしてこちらでは、皇子の名が転生を客観的事実として承認する決め手となっているのである。

以上、下巻第三九話の二つの転生話について、それぞれの中心部分を見て来たのであるが、いくつかの共通点のあることが分かる。これまでに触れた点だけに絞れば、まず第一に、善珠も寂仙も共に死に臨んで自己の皇子への転生を他者に予告していることが挙げられよう。先述のとおり、この予告が皇子への転生を完遂する目的で行われたのか、あるいは彼等が共に自己の次生を生前に予知していたことを示すのか、そのいずれであるかは不明である。第二に、当人の予告（飯占・録文）によって転生が他者の知るところとなっている点である。そして第三に、動かしがたい証拠（ほくろ・諱）によって転生が確認されていることである。

右に挙げた共通点の中で、ここで特に注目しておきたいのは第一の転生の予告である。予告が転生

の完遂のために行なわれたのか、予告した者の特殊な予知能力が示されたということなのか、そのどちらとも考えられるが、仮に後者であるとするならば、次のような推定が可能であろう。

本話に先行する第三八話「災与善表相先現而後其災善答被縁」は、題名が示すように吉事・凶事には必ずその前兆があるということを、歴史上の事件や編者自身の体験を例示して語っている。その冒頭に、「夫れ善と悪との表相、現はれむとする時は、彼の善厲の表相に、先づ兼ねて物の形を作し、天の下^めの国を周^{ある}り行きて、歌^{うた}ひて示す。時に天の下^めの国人、彼の歌音^{うたごゑ}を聞き、出で咏^{うた}ひて伝通す。云々」とあるように、前半部では道祖王の死など奈良時代の政治上の大きな動き五件について、必ずその前兆として天下に童謡^{わらうた}が流行したことを語る。後半部では、編者自身が実見した星や月の変異に続いて夢の体験が語られ、それに対応する身辺の出来事が述べられている。そしてこの話全体は次のように締め括られている。

是以当知。災相先兼表。後其実災来也。然。景戒。未推軒轅黃帝之陰陽術。未得天台智者之甚深解。故不知免災之由。而受其災。不推除災之術。而蒙滅愁。不応不勤。不可不恐也。

こちらでは凶事に限定してその前兆が必ずあることを繰返し、翻って自己には前兆を読み解き凶事を回避する能力の乏しいことを歎き、一層の努力と畏怖とを肝に銘じている。

前章で指摘したように、この下巻第三八話は現報が必至であることを強調していると言うよりはむしろ、前兆によって果報を予知することは可能なのだと説いているように見える。右に引用したこの話の末尾の編者の慨歎は、そうした予知能力の不足の自覚に起因している。自己の予知能力の不足を

自覚する編者が、卓抜な予知能力の持ち主であつた善珠や寂仙を称賛するということは十分にあり得ることである。下巻第三八話と第三九話とは、未来の予知をめぐる話として一つの共通点があると言えるのではなからうか。以上、仮説の域を出ないが、一案として提示したい。第三八話に編者自身が登場し、続いて第三九話の第二話の末尾で嵯峨天皇（寂仙の後身）聖君論が展開される。前章で触れたように、それは編者の嵯峨天皇に対する熱烈な忠誠心の表れであるとの指摘がある。傾聴に値する説であると考えられるが、その場合、編者の嵯峨天皇に対する忠誠心は、天皇の前身、寂仙の如上の卓抜な能力に対する称賛、そしておそらく予告どおりの転生が遂げられたことに対する称賛と無関係ではなからうと思われる。

二 禅師

下巻第三九話は「智行並具禅師重得人身生国皇之子縁」と題されている。筆者は前章では二人の主人公、善珠と寂仙とを僧侶と一括したが、題名では禅師と一括されているのである。本書の編者は、僧侶と称するよりはその対象を狭く限定するであろう禅師の称で両者を一括しているのである。題名に従えば、この皇室への生まれ変わりを記した特異な転生話の主人公は二人の禅師なのである。題名ばかりではなく本文中にも「尺善珠禅師」「彼禅師」「禅師善珠」「善珠禅師」「浄行禅師」「寂仙禅師」の称が使用されており、本書の編者は両者を禅師と認識していたと言つてよいであろう。

この禪師の称は、奈良時代中期以降、諸文献に多出する。舟ヶ崎正孝氏はそれらによって禪師の概念規定を行った。同氏によれば禪師とは「持戒持呪の修行に従事して、僧としての資質をたかめるとともに、弘法看病などの属性を宗教的に体現した僧⁽²⁾」ということになる。諸文献から抽出される禪師像の概括として妥当なものと考えられる。禪師とは、寂居・学解において特色を示す僧侶とは対照的な、持戒や看病といった修道的・実践的な資質や属性において特色を発揮する僧侶の呼称と言えるであろう。

さらに舟ヶ崎氏によれば、諸文献に禪師の称が多出する時期はまた官府がそうした僧侶に多大な関心を寄せ始めた時期にも一致する。⁽³⁾持戒と看病とに特に優れた僧侶を禪師に任じ、またそうした型の僧侶の出現を奨励する施策が講じられて行くのである。たとえば天平勝宝八歳(七五六)には疹疾の徒の救療のために医師や禪師が京・畿内に派遣された。⁽⁴⁾同年禪師法榮の顕彰が行われた。⁽⁵⁾同年看病禪師百二十六人が屈請された。⁽⁶⁾宝龜三年(七七二)には、「持戒称するに足」る者、「看病声を著」わす者十名を抜擢していわゆる十禪師制が発足した。⁽⁷⁾こうして、いわば官製の禪師の歴史が始まるのである。その中に登場するのが、延暦十六年(七九七)に十禪師の一員に加えられた最澄(七六七?~八三二)である。⁽⁸⁾平安新仏教の開祖の一人である最澄にとつては、十二年の山居の後に十禪師の一員に加えられたことは、彼の対社会的活動の第一歩であつた。官府による禪師の任用と禪師型僧侶の出現奨励策とは、平安新仏教の誕生を促すこととなつたと言えようか。

以上、奈良時代中期以降、寂居・学解よりはむしろ修道的・実践的な資質・属性において優れる僧侶が、官製・私製を問わず禪師と称され尊重される風潮が高揚した。そしてその中から次代の新仏教を創始する者も出現したと考えられるのである。禪師の称はこれを史的概念として捕らえれば、寂居・学解よりはむしろ修道的・実践的な面において優れた僧侶に対する呼称であり、特に奈良時代中期以降、官民の別なく多用されたと言えよう。禪師の称は奈良時代中期以降の仏教の動向を探る場合、いわば一つの指標となる語と言えるであろう。

では先の舟ヶ崎氏が抽出された禪師の像に下巻第三九話の二人の禪師を対照させた場合、どのようなことが明らかになるであろうか。編者は本話の題名に「智行並具禪師」と善珠・寂仙を一括している。両者がその様に一括される所以を本文に見てみることにする。

存命中の善珠については次のような叙述がある。

尺善珠禪師者。俗姓跡連也。負母之姓。而為跡氏也。幼時隨母。居住大和国山辺郡磯城嶋村。得度。精懃修学。智行双有。皇臣見敬。道俗所貴。弘法導入。以為行業。是以。天皇。貴其行徳。拜任僧正之。

以下に臨終の叙述が続く。右の引用から分かることは、善珠の父は明らかではなく、母方の跡連を称したこと、幼時、母に従い大和国に住んだこと、出家後は学解に精励し、智恵・行業を兼備したこと、道俗の別を問わず上は天皇に至るまで彼を尊敬したこと、仏教を広め人々を教導することを自己の務めとしたこと、天皇の尊敬を得て僧正に任ぜられたこと、以上である。「智行並具禪師」としての存命中の善珠の叙述は、極めて簡略であり抽象的である。先の禪師像に比較して言えば、善珠の場合は学

解僧としての一面もあったことと、広く道俗の尊敬を集め、遂に僧正を拝任したことが付加されるであろう。しかし彼の禪師としての具体的な活動はここからはまったく明らかにならない。

次に寂仙の存命中の姿の叙述を引用する。

昔。諾楽宮廿五年治天下勝宝応眞聖武太上天皇之御世。又同宮九年治天下帝姬阿陪天皇御世。彼山。有淨行禪師。而修行。其名。為寂仙菩薩。其時。世人道俗。貴彼淨行。故美称菩薩。

善珠と同様、以下に臨終の叙述が続く。右の引用からは次のことが分かる。割愛した冒頭の部分を補いつつ記せば、伊与（予）国神野郡の石鎚山は高峻で人を寄せつけなかったが、聖武・孝謙両天皇の頃、寂仙がそこで修行していたこと、この淨行の故に彼は人々から寂仙菩薩と尊称されたこと、以上である。善珠の場合と同様、その叙述は簡略かつ抽象的であり、禪師としての具体像はよく分からない。先の禪師像に比較すれば、これは善珠と共通するが、道俗の尊敬を集めたことが付加されよう。僧正を拝命した善珠のような官府との関係は、右の叙述からはなかったと言えよう。

以上、要するに善珠についても寂仙についても存命中の禪師としての活動は、本話では少しも明らかにされていないのである。唯一、具体的なのは両者が死後、ともに桓武天皇の皇子に生まれ変わったことと、その生まれ変わりを予告したことである。これはしかし本話の編者が叙述の中心をそこに置いたことからすれば実は当然のことである。ここで問題としたいのは、編者が両者を禪師と一括しながら、その具体像を明らかにすることなく転生の叙述に進んでいることである。編者は本話の題名に「重ねて人身を得」の一句を入れている。この句は善珠の話の末尾にも見える。編者がこの句によ

って語りたかったのは、善珠と寂仙とが予告した上で皇子に生まれ変わったことはもとよりであるが、それ以上に、得難いとされる人身^{（9）}を彼らが重ねて得たということであろう。そしてそれが「智行並び具する禪師」において初めて可能であったということであろう。諸文献からの抽出によつては得られなかった禪師像の一面が本話に示されているのではなからうか。あるいは禪師と称された者が体現する仏教の一面が提示されているのではなからうか。「智行並び具」する禪師と単なる禪師とは区別されなければならぬであろうが、少なくとも編者において理想とされる禪師像や禪師の体現する仏教が本話で提示されたとは言えるのではなからうか。傑出した禪師においては得難き人身を再度得ることも、さらに皇子に生まれ変わることも可能であると本書の編者は言おうとしたのであろう。

注(1) 虎尾俊哉氏「日本靈異記覽書」〔古代典籍文書論考〕吉川弘文館、一九八二年三月刊行、所収、一七六頁以下〕によつて「九年」を「天平」に改める。

(2) 「奈良時代の禪師について」大阪教育大学紀要二〇巻第二部門、一九七二年三月刊行、所収、二七頁。

(3) 注(2)と同じ、二八頁。

(4) 『続日本紀』天平勝宝八歳四月壬子条。新訂増補国史大系普及版前篇、吉川弘文館、一九七四年四月刊行による。以下の『続紀』の引用も同じくこれに依る。

(5) 『続日本紀』天平勝宝八歳五月丙子条。

(6) 『続日本紀』天平勝宝八歳五月丁丑条。

(7) 『続日本紀』宝龜三年三月丁亥条。『類聚三代格』第三卷、「僧綱員位階并僧位階事」宝龜三年三月二二

日本政官符。新訂増補国史大系普及版前篇、吉川弘文館、一九七四年七月刊行による。

(8)『叡山大師伝』伝教大師全集第五巻、付録、世界聖典刊行協会、一九七五年四月復刊、六頁。『伝述一心戒文』同上、第一巻、五九五頁。「延暦十六年十二月十日治部省符」(『天台霞標』三一)平安遺文第四二九一号、古文書篇八、東京堂出版、一九七五年六月、訂正四版、三二〇九頁。

(9)たとえば最澄の著名な「願文」には次の一節がある。「難得易移。其人身矣。難発易忘。是善心焉」(伝教大師全集第一巻、世界聖典刊行協会、一九七五年四月復刊、一頁)。また唐道世編『法苑珠林』巻二三「慚愧篇」「引証部」所引の諸仏典には同義の句が散見する(大正新脩大藏經第五三巻、事彙部上、同刊行会、一九六二年九月再刊、四五四頁以下)。

初出一覧

I 聖霊・因果の理法・天皇

一 『日本霊異記』における「聖霊」

原題 『日本霊異記』における「聖霊」の觀念

二 『日本霊異記』における因果の理法
ノートルダム清心女子大学紀要文化学篇二巻一号、一九七八年三月

三 『日本霊異記』における因果と表相
ノートルダム清心女子大学紀要文化学篇三巻一号、一九七九年三月

四 『日本霊異記』における因果と表相
研究ノート『日本霊異記』下巻第三八話小考

五 『日本霊異記』における因果と表相
古典研究一二号、ノートルダム清心女子大学国語国文学科、一九八五年二月

六 『日本霊異記』における因果と表相
日本思想史学二〇号、日本思想史学会、一九八八年九月

七 『日本霊異記』における因果と表相
原題 研究ノート『冥報記』序文小考―『日本霊異記』の位相を考えるために―
古典研究一四号、ノートルダム清心女子大学国語国文学科、一九八七年二月

II 説話各論

一 推古天皇・聖德太子と大部屋栖野古―上巻第五話―
原題 研究ノート『日本霊異記』上巻第五話小考

二 古典研究一五号、ノートルダム清心女子大学国語国文学科、一九八八年三月
大神高市万侶と「諸天」——上巻第二五話——

原題 研究ノート『日本霊異記』上巻二十五話小考

三 古典研究八号、ノートルダム清心女子大学国文学科、一九八一年三月

高橋東人とその母——中巻第一五話——

原題 報恩・追善をささえる論理——『日本霊異記』中巻第十五話およびその再録説話をめぐって——

藤原暹編『日本生活思想研究』一九八九年三月

四 魚を食う僧と「天」——下巻第六話——

原題 『日本霊異記』下巻第六話「僧侶の魚食説話」覚書

生活文化研究所年報四輯、ノートルダム清心女子大学生活文化研究所、一九九〇年十一月

五 美作の国司と「知識」の結成——下巻第一三話——

原題 観音と国司——『日本霊異記』下巻第十三話「美作鉾山説話」の一考察——

藤原暹編『続・日本生活思想研究』一九九〇年一二月

六 皇子に生まれ変わった禪師——下巻第三九話——その一

原題 研究ノート『日本霊異記』下巻第三九話小考

古典研究一〇号、ノートルダム清心女子大学国語国文学科、一九八三年三月

七 皇子に生まれ変わった禪師——下巻第三九話——その二

原題 研究ノート『日本霊異記』下巻第三九話小考（その二）

古典研究一一号、ノートルダム清心女子大学国語国文学科、一九八四年三月

著者略歴

八重樫 直比古（やえがし・なおひこ）

一九四八年 岩手県に生まれる。

東北大学大学院修了

現在ノートルダム清心女子大学教授

古代の仏教と天皇——日本霊異記論

一九九四年一〇月二〇日

第一刷

定価——二八〇〇円（本体二七一八円）

著 者——八重樫直比古

発行者——今井 肇

発行所——株式会社翰林書房

〒104 東京都千代田区神田神保町一—三— 電話〇三—三二九四—〇五八八

印刷所——壮光舎

装丁——石原 亮

© Yagashi Naohiko 1994 Printed in Japan.

ISBN4-906424-56-2 C3039